



Title	開識社の研究
Author(s)	亀井, 秀雄
Citation	北大百年史, 通説, 565-579
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/30026">http://hdl.handle.net/2115/30026</a>
Type	bulletin (article)
File Information	tsusetu_p565-579.pdf



[Instructions for use](#)

## 開識社の研究

亀井秀雄

## 一 着想および文学観について

開識社という、農学校生徒の文学会 Literary Society の結成事情を告げる、多分最も早い記録は、クラーク文書三二(『北大百年史 札幌農学校史料(一)』二一七、文学会設立許可願)である。これによれば、一八七六年(明治九)十一月一日の日附を以て、荒川重秀ほか一八名の学生が許可願を提出し、それにクラークが推薦の言葉を書き添えて校長 Director の調所広文に送ったらしい。文学会の設立を望む学生たちの目的は、知識を伸ばし、英語と日本語の話し方および作文能力を向上させることであつた。

ただし、その希望が学生自身の自発的なものであつたかどうかは分からない。逢坂信忠は『クラーク先生詳伝』のなかで、

「これは必ず先生の徳憑であつたことと思われる」と言い、右の許可願の和文訳を紹介した上で、「早速『開識社』というが「<sup>キヤ</sup>設立され、先生自らその『規則及細則』7箇条(10年1月上旬早々と推定せらるる真筆今尚保存)を起稿」と書いている。彼がこのように判断した資料的な根拠は明示されていないが、たとえ当時の学生だった人からの伝聞にすぎなかつたとしても、クラークの「徳憑」という点は確かに考慮されてしかるべきであらう。

クラークが編集し、もろく自身も執筆した *First Annual Report of Sapporo Agricultural College* (『札幌農学校第一年报』明治十一年十一月刊)のなかで、開識社の活動が次のように報告されている。"A literary society has been organized with the name Kaishikisha, and all the members of the College are striving at their weekly meetings to improve in debating,

writing and speaking, in both the Japanese and English languages”

学生の許可願になかった debating がここに加えられ、開識社の記録を見れば declamation も行われた。釜坂信彦が紹介した、「且つ自ら『演壇に立ちし時の態度、姿勢より音声の抑揚に至るまで、一々やうて見せられた』のである」という証言もそれに照応するだろう。つまり実際の運営は、まずクラークの強力な指導の下に始まったと推定される。この開識社に関する報告は、クラークが農学校を辞めた後の『Second Report (第二年報)』以後には見られない。これを逆言せば、少なくともクラークにとって開識社は公式の報告に記載すべき公的な団体と認識されていた。“all the members of the College” という表現が、それを示している。

ちなみに、『第一年報』によれば当初の入学者は二四名であったが、クラークがその報告を執筆した一八七七年（明治一〇）三月の時点では——『第二年報』によれば——一八名で、開識社の規則書にその全員が署名している。許可願を提出した一九名から一人減っているのは、この間退学者があったためらしく、クラークが言う“all the members……”はもちろん間違っていない。

もっとも、開識社の規則にもやや不思議な点があり、それは

学生の自主的な入社を保証しているにもかかわらず、それに対応すべき自発的な退社を保証する条文がないことであった。  
“but may be expelled by a vote of two — thirds of the members present at any regularly called meeting for negligence of duty or improper conduct” といわねば除名の場合しか規定していないのである（第六条）。

これは、いわゆる禁酒禁煙の誓約における、“The undersigned officers and students of the Sapporo Agricultural College, hereby solemnly promise to abstain entirely from the use, in any form, except as medicines, of opium…… so long as we are connected with the institution”（下線は引用者）という発想と共通する。

このような面から見ると、クラークのいわゆる“all the members of the College”は単なる事実の報告にとどまらず、開識社の将来のあり方にかかわる指示のニュアンスを帯びてくる。全員主義あるいは統制主義、とも呼ぶべきクラークの発想が窺われるのである。

しかし、学生の自主的な団体に退社の規定がないのは明らかに不都合である。それが顕在化したのが第一〇二会（一八八〇年九月二十五日）における開識社規則の確認であった、と思われるが、その点は改めて取り上げることとして、もう一つこの“literary”の観念を確かめておく必要がある。

この「文学」観が、今日一般に言うところの創作や批評と著しく異なること、いまさらことわるまでもない。ただし、一八七七年前後の日本人にとって「文学」とは文字書籍に関する学問を意味し、創作や批評のほうがむしろ無視されていた。太田雄三は『クラークの一年』という研究のなかで、ホイラーが家族に送った手紙に『日本の教育』についてのパンフレット」を挙げていた点に注目し、「これは森有礼が編さんして一八七三年にニューヨークで刊行した *Education in Japan: A Series of Letters Addressed by Prominent Americans to Arinori Mori* のことであろうか。もし、そうだとすればそれはクラークのアマスト大学教授時代の同僚 William Stearn や Julius H. Seelye の日本の教育に対する建言も収録されている本である」と推定している。

そのほか、可能性としては、David Murray が一八七六年ニューヨークで出版した *An Outline History of Japanese Education* が挙げられるが、これは日本の文部省の依頼を受けて執筆されたもので、その和訳が一八七七年八月、大關慕萊<sup>オモトシノブ</sup>・小林儀秀訳『日本教育史略』として刊行された。森有礼編纂のものは、森自身の日本歴史に関する長文の序文と、アメリカの学者や牧師から寄せられた一四篇の回答、及び二篇の論文によって構成されているが、その中心的なテーマは、日本語を廃止して英語を採用することの是非をめぐる問題であった。

『第二年報』に述べられた日本の教育の歴史に対する批判から見て、ホイラーを啓発したのは『日本教育史略』の英文のほうではないかと推定されるが、ともあれモルレーの眼に映った我が国の文学状況とは、次のようなものであった。「日本ニ於テハ古来文人墨客アリテ人民大ニ之ヲ尊重シ、通例或ハ大政府或ハ諸侯ヨリ之ニ俸祿ヲ給与セリ。日本古代ノ文学ト称スル者ハ、専ラ歴史理学詩賦小説ノ類ニシテ、木板ヲ以テ印刷スルノ術云播セン以来、賤価ヲ共テ書籍ヲ増加スルコトヲ得ルナリ。小説ハ広く衆人ノ読ムモノニシテ、殊ニ婦女子ノ好ムモノ多シ。外国ト交際ヲ開テ邦人ノ氣ヲ鼓動セン以来、外国ノ學術及外国ノ法律風俗ヲ知ントスルノ志望極テ盛ナリ。故ニ目今日本ノ文学ハ、此需用ニ応ゼンが為ニ、其方向ヲ転ズルト云モ可ナリ」。それでは、日本人自身にとって文学とはどういうものか意識されていたか。その『日本教育史略』に収録されている榊原芳野篇「文芸概略」によれば、文学とは儒学を始め、書学、画学、医学、薬物学、外科、鍼医、曆学、漏刻学などを含み、文房具にまで及んでいたのである。和歌や物語文学については、別に、「文章」という章が設けられていた。

当時の農学校生徒は、もちろん個人的に和歌や漢詩文を嗜む学生もいたであろうが、その文学観は右の場合とそれほど変らなかつたと思われる。そういう学生たちが、モルレーの観察し

た、「目今日本ノ文学ハ、此需用（外国ノ學術及外国ノ法律風俗ヲ知ントスル）ニ応ゼンガ爲ニ、其方向ヲ転ズル」動向のなかで、文学会の結成を思い立ったのだと見ることが出来る。

ホイラーが『日本教育策』や『日本教育史略』に類する英文パンフレットを読んでいたからと言って、クラークも手に取って見たとはかぎらない。だが、手にしてみた蓋然性のほうがはるかに大きいだろう。そして、ホイラーが読んだ可能性のある本のなかで、私が『日本教育史略』をより重視する理由は、我が国の当時の諸学校のカリキュラムがくわしく紹介されていたからである。彼らの構想するカリキュラムが、マサチューセッツ農科大学のそれを基本としたことは当然考えられるが、その授業を受ける日本の学生がどのような教育制度の、どんなカリキュラムで学んできたか、彼らには重要な関心事だったと考えざるをえないからである。

もしこの推定が正当ならば、クラークはある程度日本の文学観をつかんだ上で、文学会の設立を「徳蕙」ないしは推薦したこととなる。クラークや、ホイラー、ペンハローたちにもどんな個人的な文学的嗜好があったかは分からないが、おそらく彼らの母国の文学は、当時の日本的文学観と必ずしも整合しなかった。彼らが不用意な人間だったとすれば、両者の文学観のずれが開社の運営過程で顕在化することもあり得、精神的な事件と

しては、かえって興味ある現象が生れたかもしれない。彼らより二年おくれて、「生理学比較解剖学兼英文学」の教師として着任したカッターの場合は、History of English Literatureを担当するに当たってそのような用意を持たなかったらしく、——この科目は一八七七年（明治一〇）、ホイラー教頭時代に第三年級後期の授業として新たに設けられた——母国の文学観または彼個人の文学的嗜好のままに授業を行ったようである。さらに一年おくれて英語教師として赴任したイギリス人教師サンマースも同様であったらしい。そのことは、『第四年報』や『第五年報』の報告および志賀重昂の日記によつて窺うことができる。そこへ志賀のような個人的な文学（漢詩文）嗜好の強い学生が入学して、新たな文学的開眼を自覚的に方法化しようとする人間が誕生するわけであるが、割り切った言い方をすれば、それは文学会の外でしか起りえない文学的事件であった。

結局開識社の活動は、『日本教育史略』的な文学観のレベルで展開されてゆく。

## 二 開識の方向と方法

開識社が正式にいつ発足したかについては、記録が欠けてい

る。ただ、一八七七年（明治一〇）十一月の記録に第三六会とあることから逆算すれば、日付が明記されている会合の最も早い、一八七七年一月二十七日は第六会となり、その前の「The next meeting was held on the 16th of the month」というのは、一八七六年十二月十六日のことであろう。この間、「第一期ハ八月中ノ第四水曜日ニ起リテ十二月中ノ第四水曜日ニ至リ其第二期ハ一月中ノ第四水曜日ヨリ七月中ノ第一水曜日ニ至ル者トス」（『第一年報』）という冬休みが挟まっていたはずだからである。とすれば、第一会は十一月の中旬でなければならぬ。

しかしその記録は、一八七六年十二月十六日（推定）から一八八一年十月二十二日の第一一六会までと、一八八七年二月六日の第一五八会から一八八八年十一月十日の第一九三会までしか残らず、何日どのような形で終わったかも明らかではない。テーマの頻度や参加者数などを統計化してみるのも一つの方法であろうが、記録が不完全で、記述の仕方にも精粗があるため、かえって把握が歪んでしまう恐れがある。ここでは第一一六会までを主な対象とし、特徴的な現象を取り上げてみることにする。

まず規約面から見てゆくと、第一〇二会（一八八〇年九月二十五日）で「梅野四男吉ノ建議ヲ用ヒ本社ノ規則ヲ編集シテ新

入生徒ニ回達順覽セシムルコトニ決」定された。それを見れば、全部で二六条、自発的な退社の規定もあり、当初の英文規則よりはるかに整備されている。この時の新入生とは、志賀重昂たちの第四期生であるが、前年の一八七九年は学生の募集を行わなかったもので、二年ぶりに新入生を迎えるわけで、しかも第一期生がこの一八八〇年の七月に卒業した。学生の顔ぶれが大幅に入れ替る転換期に、改めて開議社のあり方を確認しておく必要を感じたのであろう。

だが、その前年の第七八会（一八七九年四月十九日）の記録に、「此日欠席人多数ニ由テ休会ス」という記事が出て以来、明らかに活動の停滞衰退が始まっていた。第八〇会（五月四日）も欠席者多数のため休会、社長は改革の必要を痛感し、第八一会（五月十日）には「当社ノ演舌会ヲ公ケニ市中ニ於テ開場シ庶人ヲシテ傍聴セシメハ大ニ社員ノ心ヲ励マサン」という意見が採用されるとともに、規則の取調委員七名が選ばれた。次の第八二会（五月十七日）に規則書の草案が紹介され、議論は第八三会（五月二十五日）にまで亘った。だが、第八五会（六月七日）には「当期中広井、諏訪ノ両氏脱社ス」という記事が見え、それ以後も相変らず無断欠席者が多く、第八八会（九月二十日）に改めて六カ条の社事が決定された。第一〇二会に確認された二六条の規則は、この社事と、五月に決定された（と

思われる)規則とを新たに編集したものであろう。

なお、広井と諏訪のほかに退社を申出た者を挙げてみれば、以下のようになる。伊藤一隆、黒岩、田内、内田、柳本(第八八会)。伊藤鑑太郎(第八九会)。藤田、佐久間、内村、太田(第九〇会)。中島、出田(第九三会)。足立(第九七会)。原田(九八会)。

その内訳は一期生七、二期生八、三期生二で、一、二期生の場合は半数近くが退社してしまったのである。三期生はもともと加入者が少なかったらしく、第一〇期(三月二十八日調査)の社員人名に名前を連ねているのは一〇名、一八八〇年十月二十二日の調べでは六名に減り、そして第四期生から新たに加した者は、わずか四名にすぎなかった。

これが何を意味するか。内村鑑三が『余は如何にして基督信徒となりし乎』で言う「七人兄弟」、つまり在学中に洗礼を受けた二期生七名のクリスチャン学生のうち、宮部金吾が残り、五名が退社している(高木を追加すれば六名。高木は一八七七年十月一日に内村たちと一緒に加入、しかし一八八〇年三月二十八日の社員人名からは消えている。なしくず的に退社してしまったのであろう)。内村たちの第二期生では、受洗しなかつた池田、岩崎、町村たちが残った。しかし内村や太田(新渡戸)と宮部の友情を考えれば、信仰の有無による分裂を見るの

は危険である。第一期生のなかでは、クリスチャン学生の信頼が大きかつたらしい佐藤と、キリスト教の布教に最も熱心だったと思われる大島が残っている。北海道開拓の使命や、北海道における農業のあり方は、開議社発足以来の一貫したテーマであった。それとともに、国際情勢に敏感に反応した政論的テーマ(「外国ノ侮慢ヲ防ク」の論、「日清兩國ノ交際ヲ破ルハ東洋政略ノ最非ナルモノナリ」、「近頃琉球事件」など)が、一八七九年(明治一二)ころから取り上げられるようになり、それに代わって労働の徳や信仰の価値を論ずる発言が見られなくなった。それが停滞衰退の原因であるか、むしろその打開策であったのか、判断はむずかしいが、少なくとも次のように見ることが可能であろう。すなわち、一貫したテーマになお関心をつなぎ得た学生は残り、新たな政論的傾向になじまない学生が退社してしまつたということである。

第一〇二回会梅野の建議によって確認された開議社規則の「緒言」は、以下のごとくであった。「国之開明ハ大ニ民人独行自立之精神ニ由ル而シテ民人独行自立之精神ハ文芸學術之進歩ヲ以テ振起ス惟ルニ我國ハ王政復古之後前代未ダ曾テアラズ他國未ダ嘗テ有ラザルノ一大進歩ヲ経教育殆ンド其法ヲ得法律稍其衡ヲ得其他百般之事亦略々其緒ニ就ケリ夫レ開明之度ハ已ニコ、ニ達セリ然レドモ其未ダ以テ富強ヲ、欧米ト、頡頏スル能ハザ

ルヤ、遠シ、噫々コレ何ノ故ゾヤ多言ヲ要セズ識見ノ乏シケレバナリ故ニ吾人ハ茲ニ此社ヲ結ビ以テ吾人が天賦之性ヲ琢キ以テ吾人が学見知識ヲ広フシ以テ吾人ヲシテ明治之聖代ニ愧ヂザルノ忠臣タラシメント欲スト云爾」。

これに続いて、「明治九年十一月」という日附が書かれているが、恐らくそれは開識社発足の日時を示したもので、この「緒言」そのものは一八七九年（明治一二）の五月に作られたものであろう。発足当初、クラークが指導した時期に、傍点を打った箇所のような発想はあり得なかつたからである。ちなみに、一八七九年五月の草案を作った規則取調委員は、荒川、岩崎、小林、佐藤昌介、高岡、鶴崎、渡瀬の七名であつた。

しかし以上のことは、もちろん当初のモチーフが見失われてしまつたことを意味しない。規則再編集の問題を検討しながら、すでにテーマの傾向変化に一部ふれてしまつたが、改めて記録の形式と内容の面に眼を向けてみるならば、一八七七年（明治一〇）三月十六日の会合から一つの転換が見られる。形式的には、共通の主題について何人かの討論者が意見をたたくかやすやり方が始まつたのであるが、それだけ会の運営や演説の仕方について学生が馴れてきた証拠であらう。論題そのものに大きな変化はない。が、おなじキリスト教に関する発言でも、それ以前

は God の存在をめぐる発表が眼につくが、この頃から religion という主体的な面を取り上げる発想があらわれてくる。 self-praise とか self-control という言葉が出てくるのも、それと関係するだろう。自己のあり方を問う意識が強まつてきたのである。

また、おなじく日本の問題を取り上げた場合、初めは Japan や Japanese という言葉が多く、日本の習俗が批判され、品位や品行を高めることの大切さが強調されているが、やはり三月十六日の形式変化のころから、country という言葉が主役に代わっている。国家の課題がより具体的にとらえられ、それとともに industry という言葉が頻繁に登場する。勤勉を意味する場合同もあるが、次第に産業や工業の意味が主流となり、もちろんかれら自身の使命は農業にあつたにせよ、それ以外のものとの相補関係による国力充実のあり方が自覚されてきたのである。もう一つ、目立つた変化を挙げるならば、それ以前のテーマの選び方はかなり恣意的であつたが、このころから自分たちの共通の課題となるべき大きなテーマが系統的に設定されるようになった。それは信仰と理性または科学との問題であり、あるいは北海道移民論であり、議會論や中央集権制の是非などであつた。

この時代の知的な青年の意識はどのようなものであつたか。



前田愛(『近代読者の誕生』)が、一八七七年(明治一〇)創刊の『頼才新誌』という投書雑誌を調べて、当時の青年が好んで取り上げたテーマを統計化している。それによれば、「勤勉・勉強」が最も多く、「光陰可惜」「學問の目的(勉強)」「忍耐」「怠惰ヲ戒ム」という順であった。この傾向は農学校生徒の場合とはほぼ一致する。しかし、前田愛はさらにその内容を検討して、『西国立志篇』の読者達が、そこに語られている諸徳目の根底をつらぬく科学的実証主義や経済的合理主義への理解に欠けていたことは、かれらの禁欲主義を根深いところで規制していたはず。『勤勉』『忍耐』『光陰可惜』等の禁欲的な徳目は、鈍重さ、内閉性、屈撓性コンキレキヤクの乏しさを帯び」と指摘しているが、農学校の生徒に限りそのような弱点は免れ得たようである。それは「科学的実証主義や経済的合理主義」とかれらの勤勉・禁欲主義が結びついていたためでもあるが、その両面における努力が直ちに国家的課題につながっているという自覚のためであった。

N. Yasuda, in Japanese = The flourish and decay of a country depend upon the greater or less degree of patriotism of its people. The origin of patriotism, according to my opinion, is the vividness of the popular mind and the best means to let them have this passion is to give them

liberty.

K. Ito, in English = Whenever we do wrong, there is something that pinches us very hard. This is called Conscience. We must always listen to and obey it; for it is the voice of our kind Heavenly Father.

いずれも一八七七年三月三日の集りにおける安田長秋と伊藤一隆の発言である。愛国心とは民衆の精神を生きいきとさせ、それには自由を与えるのが最良の方策だ。フナナティックな国家主義の汚染をすでに予想していたかのように、愛国心の原点を問う、この安田の発言は、かれ自身のオリジナルか、それともクラークたちから学んだものかは分からないが、注目に価する意見で、内村鑑三や志賀重昂のナシヨナリズムの源泉たる当時の農学校の雰囲気伝えるものであろう。伊藤の発言は、キリスト教によって禁欲主義が主体的に自律化されてゆくあり方を示している。

そのような精神的傾向のなかで、先ほど指摘したような共通テーマが継続的に取り上げられていったのである。

このころクラークは *First Report* を執筆していたわけであるが、カリキュラムを解説したのが、卒業生のあるべき姿を “The instruction should be as practical as possible in all departments so that the graduates of the College may ever be

distinguished for their sound judgment, their enterprising spirit, and their strict morality.” と語った。実践的な授業による徳目の涵養。この点にかぎらず、開校式の演説や *First Report* におけるクラークの表現と、開識社記録の学生の発言との類似は、随所に見出すことができる。

ただ、クラークは、学生の自主性を重んずるとともに、それと矛盾する統制主義者的な一面を持っていた。入学誓約書や禁酒禁煙の誓いの表現がそれを端的に示している。近い将来開拓使の役人となるべき学生、という以外の見方を彼は持たなかったらしい。時として cadet と彼ら呼んだのも、そのあらわれであろう。人民が視野に入ってくるのは、指導の対象としてとらえられた場合だけであつたらしく、*“A country is nothing without men, men are nothing without mind, and mind is little without culture.”* という表現もみられるが、それは他人の言葉を引用したなかであつた。しかもこれを引用したのは、青年を教育して富国強兵を実現するという結論を導き出すためだったのである。

彼が農業を國家の基礎と主張する、その主要な理由の一つは、領土確保の意志を人民のなかに育てうるからであつた。

Agriculture is the surest foundation of national prosperity. It feeds the people, converts the elements into

property, and furnishes most of the material for manufactures, transportation and trade. The business of a country can be most profitably done by resident citizens who are intelligently and earnestly devoted to its welfare, and they alone can be relied on for its defense in time of foreign invasion. As soon as practicable, therefore, the migratory fishermen of Hokkaido should be converted into Permanent settlers. (下線は引用者)

農業的定住によつて、出稼米的自然物採集者から土地所有権を勝ち取つてきたアメリカ移民のイデオロギイが、ここに見られる。そのイデオロギイの、すぐれて実践的な主体を育てることが彼の目的であり、農学校生徒はその期待によく応えつゝあつたのである。

しかし、クラークの跡を継いで二代目教頭 President となつたホイラーは、以上とは異なる教育観や人民観を抱いていたようである。

The nation can have few resources except through the people. In every free country, the people are first, the government last in order of dependence. The government must serve them always if it would serve itself best.

これはホイーラーが執筆編集した *Second Report* (1878) の一節であるが、このような人民主体の政府観から、さらに “the true national wealth and prosperity is only the reflection of their own.” という意見が述べられ、開識社（日附は不明、多分一八七七年五月頃）における山田義容の発言（A country is the reflection of its people）に、その影響が認められる。またこれには、中央集権と地方分権の優劣をめぐって論議が交わされている時期であった。その数回前、国会の必要が論じられた時、学生たちの一致した意見は次のようなものであったが、これもまたホイーラー的な発想のあらわれと見ることができている。“As a collection of people makes up a country, they must be allowed to partake the management of the public affairs of the state.”

ただ、このような議論を重ねていたにもかかわらず、その後全国的に盛んになった国会開設請願運動や民権運動に対するこれら一期生の反応は極めて低調だったらしい。開識社の記録や、当時学生だった人の回想にもその反応はほとんど見られないからである。この点は、当時の国家的危機だった西南戦争という内乱に対する反応が見られないことと並んで、奇妙な印象を与える。彼らの認識は、大枠のところでは結局将来の国家の役人という意識に拘束されていたのかもしれない。そしてホ

イーラーの影響がクラークほど顕著ではない、少なくとも学生たちの意識のなかに顕在的ではなかったのは、経験の差からくる教育者としての力量の違いや人格的影響力の相違によるものであろうし、長期に渡る内発的な問題意識の持続力を尊重する発想それ自体が、輪郭のはっきりした理念の形を取りにくかったためであろう。

彼は農学校生徒の「利発」や「好學」心を高く評価しながらも、新たな事態に処する問題解決能力の低さや、“practical, progressive, self-asserting spirit” の乏しさを批判する。正確に言えば、長年日本の教育を観察した人の上記の意見を、彼は共感を以て紹介し、そのような欠陥の原因は、数百年に及ぶ “Utter dependence, even to Veneration, upon the ancient classics of equally inert China as the fount of all knowledge, gave no impulse to rise above its source.” という教育方法にある、と指摘した。先ほど私が『日本教育史略』を手にしたことがあるのではないかと推定した理由はこのような点からであるが、彼の認識が妥当であったか否かはともかく、以上のような問題意識によって彼は農学校生徒のなかに “powers of thought” を喚起しようとしたのである。

彼が言う「思想」とは、自分が何事かを知ることが同時に知る理由を自覚することだ、というあり方を指していた。役人を

養成することだけが、かれの教育目標ではなう。"We teach a young man mathematics, logic and natural science, not that he may simply take his equations and diagrams into a government office, or carry his borrowed propositions and demonstrations into the national council chamber,.....but that he may bring into all these places a mind so well stored with the sound principles of truth and reason as to be able to distinguish between fact and appearance, argument and sophism." (19) 彼は、農学校生徒のために研究者のコースを設計してやることになるわけだが、もともと彼の理念は、一部の人間の知的専有による社会の抑圧構造を打破することにあつたようである。"The helpless masses in yielding their substance to the powerful, learned to be content with a mere life-sustaining pittance. The powerful, whose strength was in the subjection of the weak, planted deep the root of helplessness in themselves." (10) 「無力ノ下民ハ惟々強力者ニ是レ従ヒ僅カニ生命ヲ保ツニ足ルニ過ギザルノ小分ニ安ンズルコトニ慣レ強ハ弱ヲ屈服シテ益々之ヲ無力ニ致セシナリ」、『第二年報』における和訳文)。こういう事態をより強化してしまふような知的専有を、彼は恐れていたのである。

右の場合は、念のため和訳文と一緒に掲げたが、それは

"substance" の意味が落ちてゐることを示したからにはかならない。人間的実質を奪われてしまふ、というような発想は、当時の日本人には分かりにくかつたのかもしれない。その点では農学校生徒も同様だつたようであるが、ともあれクラーク的なイデオロギーを主旋律としながら、ホイラー的発想が倍音的にからみ合つて彼らの関心を少しづつ拡げていた。そこへ第二期生が入つて来たのであつた。

第二期生の加入は一八七七年(明治一〇)の九月十六日と十月一日の二度に亘つて行われた。ただ、このころから開識社の記録はテーマのみを書き留める形に簡略化されているので、その具体的な展開を知るのはむずかしい。だから、これは推測にすぎないのであるが、新年度の最初の集りと思われる九月九日の会合と、次の九月十六日の会合でキリスト教の日本への紹介や神の存在、そして信仰の喜びなどのテーマが集中的に選ばれているのは、クラークがアメリカへ去つた(四月十四日)空白感を埋めつつ、同時にその精神を新入生にアピールするためであつたのだから。

このころ入信の勧誘が強行的に行われたことは、内村の自伝によつてよく知られている。十一月の第三六会で、太田(新渡戸)稲造が "Pledge should not be violated" と発言したのは、それに対する抗議だつたかもしれない。もっとも、太田自身

は、十月二十七日附の父親宛の手紙で改宗のことを告げており、大島正健の『クラーク先生とその弟子たち』によれば、太田は「在京中に早くも基督教的信仰が芽生えていたものと見て、札幌へ来た折には立派な英語聖書を携えていた」と言う。太田の一八七八年一月二十一日附の書簡にも「神(西洋語ニ而はゴッド、ジェホバ等)之有る事は御秘蔵之某書ニ而御覽被下度候」とあり、たしかにその下地はできていたのであろう。とすれば、その抗議は、入信に抵抗する内村たちと上級生とのトラブルを指していたことになる。抵抗していた内村たち二期生八名が、イエスを信する者の誓約(Covenant)に署名したのは、十二月十一日と十三日で、これによって新入生全員が入信した形となった。

この間、開識社内部の問題意識は、記録されたテーマを見るかぎり大きな変化はなかったように思われる。一八七八年(明治一)四月十三日からの第四期を始めるに当たって、「According to the newly added of the Society,……」という表現が見え、これ以前に規約の追加があったらしいが、内容は不明。ただしそれに続く表現から見ても、役員組織に関するものだったようである。

しかし、一八七八年二月、学校内のキリスト教のあり方を変えざるをえない事態が発生した。開拓権大書記官で農学校校長

の調所広文が、教頭ホイラーに対して、学生の間で信仰をめぐる確執が続いているようだがしかるべく所置するように、と要請してきた。それだけでなく、農学校生徒の一人が東京の知人に宛てた手紙が、ある新聞に投書され、その手紙の写しが東京書記官から札幌書記官へ送られてきた。手紙は、悪意ある言葉で布教と信仰の様子を嘲笑的に描いている(『札幌農学校史料(一)』二八四)。もともと農学校の聖書教育は、黒田清隆の独断で黙許されたことだった(『札幌農学校史料(一)』二二八)。この手紙の新聞掲載は喰い止めたようであるが、もしその内容や学生間の確執が表沙汰になれば、黒田の立場にかかわり、農学校の存在も危うくなる。それを防ぐには、校内の信仰活動を禁止するしかないであろう。

J・M・マキの『クラーク』(高久真一訳)に紹介された、佐藤昌介のクラーク宛の手紙(一八七八年二月十四日付)によれば、「私達の思いはできるだけ胸にしまっておくように」と注意された、と言う。正式の禁止通告を出すわけにいかない性質の事態なので、個人の信仰には干渉しないが……という形で、布教活動に類する行為の停止を個別的に説得していったようである。多分このような事情のため、開識社記録からキリスト教信仰に関するテーマは姿を消してしまった。回想好きの一、二期生も、この時期の確執葛藤については何ごとも語って

いない。

だからその事態は分らないところが多いのだが、確執を内攻させ長引かせた原因の少なくとも一つは、クラーク独特の契約観にあったことは疑いえない。脱退への配慮を欠いた誓約に署名してしまった学生が、どうしても脱けたいと思いついた時、内的な葛藤は劇しいものにならざるをえず、他方その誓約を守ろうとする学生たちの間では、自己肯定的な正統派意識が強められてゆく。大島正健(「クラーク先生とその弟子たち」)

が、「正義派」を自認し、山田義容を「クラーク先生の感化も及ばない燕麦」「仮面をかぶった思わざる悪の種」と非難したのは、その一例である。これは、その二年後山田が不品行の理由で退学させられた事件に言及した時の表現であるが、この山田は一八七八年二月、「有害な議論の末」イェスを信ずる者の誓約から脱退した一人であった(逢坂信彦「クラーク先生へ弟子達の送りし書状一束」)。いわばこの時の injurious な感情を、大島は別な事件で吐き出したのである。

開識社記録の、英文の部分は、第六六会(一八七八年十一月九日)から数回、もう一度くわしく記述されるようになり、小野(兼基か琢磨かは不明)がクラーク精神と言うべきものを語っている。すでに第三期生も入学していたが、加入率は低かったらしく、信仰の面でも「彼等(第三期生)は機会あるごとに、

いつでもキリスト教に反対しようと試みている」(田内捨六のクラーク宛書簡、十二年三月四日。逢坂「クラーク先生へ……」)という状態であった。そういう状況のなかで、クラークの教えを確認しておきたかったのであろう。むろんキリスト教に関しては一言も言及していない。

### 三 変 容

一八七九年(明治一二)の開識社の状況は、すでにふれておいた。クラーク精神とは右のような事情によって作られてきたようであるが、しかし第一期生にとってはクラークと切り離してその農業観や自己修養論を考えることはできなかったにせよ、三期生にとってはもはや抽象的な存在にすぎない。そういう下級生に対してクラークの事業を強調する。その裏側に、大島が垣間見せたような強烈な正統派意識があったとすれば、かえって彼らの発想を硬直化させ、クラークの教えを教条化する結果となりやすい。「快樂ハ人世ニ必用ナリ」(第六九会、十二年二月八日、出田)「宗旨ヲ異ニスルハ国乱ノ基デ有タリキ」(第七四会、三月二十二日、佐「藤」男)「人智ノ発達ハ廉恥ヲ滅消ス」(第七六会、四月五日 E伊藤)など、クラークの教えにイロニカルに反発した発言をする者が彼ら一期生のなかに

も現われ、結局その者たちは社員人名から姿を消してゆく。

これではクラークの思想の全体的な受容が貧しくなり、それと相補的に作用したホイーラーの思想を独自に発展させてゆく意識も育たない。一八八〇年に整理された規則「緒言」の、「国之開明ハ大ヒニ民人独行自立之精神ニ由ル而シテ民人独行自立之精神ハ文芸學術ノ進歩ヲ以テ振起ス」という理念が、もし単なる時代的な合言葉の借用でなかったとすれば、それはホイーラーの思想の影響である。が、少なくとも開識社の記録で判断するならば、積極的に彼らがその理念を育てようとした様子は見られない。ホイーラーが言う Powers of thought を最も強く体現することになったのは、二期生の内村鑑三だったと私は考えるが、その詳論は本論の枠を超えてしまう。そのホイーラーは一八八〇年（明治一三）の暮か、あるいは一八八一年の初めにアメリカへ去る。ただし、一八八〇年の少なくとも六月以前、彼に代わって、ペンハローが教頭心得の位置に就いていた。卒業生の幾つかの回想記の印象では、ペンハローの人間的魅力はむしろホイーラー以上であったらしいが、ただ彼は積極的に思想を語るタイプではなかったようで、Annual Report の事務的な報告から学生の文学活動と結びつく理念を見出すことはむずかしい。

一八八〇年から一八八一年にかけての特徴は、当時の政治運

動を敏感に反映していることである。開識社規則の整理確認が行われた第一〇二会で三期生の梅野が「夫ノ集会条例ノ我国民ヨリ漸ク政事之思想ヲ奪ヒ遂ニ我国ヲシテ復政談ナキノ慘状ヲ呈セシムルヲ虞リ」、二期生の鶴崎が、「我国之大困難タル条約之改正」と「紙幣之下落」の問題を論じた。一期生が卒業し、四期生を迎えて、新しい方向を呈示した演舌と言えらる。それに応えるように、新入生から、頭本元貞「反動力之説」（第一〇四会、一八八〇年十月二十二日）、中川太郎「時難ヲ救フハ一ニ諸君ニ在リ」（同前）、黒宮正雄「愛国論」（一〇五会、十一月十四日）などの発言が現われてきた。

当時のジャーナリズムで、これらの関心を最も強く喚起したのは、一八八〇年三月十三日創刊の『愛国志林』（同年八月十四日号より『愛国新誌』と改題）だったと思われる。その意味では、開識社「緒言」の「民人独行自立」云々の主張も、例えば国会論第一篇「人智開発ノ事」（『愛国志林』一八八〇年五月二十六日）などとの関連でとらえてみる必要がある。「未ダ富強ヲ欧米ト誦頭スル能ハザル」云々も、不平等条約撤発の気運と無関係ではありえない。一八七八年後半から、時々国会や Military Posts の必要をテーマとする発言が見られ、また三期生伊吹の「外国ノ侮慢ヲ防クハ果シテ書生ノ任ナル哉」（七六会、一八七九年四月五日）などは、一面で、『愛国志林』の主

題を先取りした発言と言えるのであるが、これらが下地となつて、一八八〇年後半からの傾向が決定的となったのであろう。

しかし、『愛国志林』のライトモチーフである自由民権に關しては、農学校生徒は必ずしも同調的でなかった。彼らの多くは士族の子弟であり、クラークが植えつけた選民意識が、「夫レ士族ナルモノハ昔日ヨリ文学武芸ヲ事トシ豪邁ノ氣象アツテ自カラ他ノ三民ニ超越スル所アリ（略）而シテ他ノ三民ノ如キハ全ク之レニ反シ昔日ヨリ常ニ圧制束縛ヲ受ル最モ甚シク碌々トシテ卑屈ノ点ニ安セシヨリ……」（伊吹「外国ノ……」）という意識に乗取られ、クラークやホイラーの開明的思想から自己改造や市民創出のモチーフが抜き去られてしまったのかも知れない。ともあれ、「全世界ハ数年ヲ出ズシテ旧野蠻ニ復ス」<sup>(2)</sup>（三期生堀宗一、第一二二会）、「耶蘇宗ハ日本國ニ不用ナリ」（同前、高岡直吉）というような発言も現われて、発足当時とは著しく面目を変えてしまった。

一八七九年（明治一二）から記録が日本語で書かれ、いわばそれに対応する形で学生の関心は国内の政治情勢に敏感に反応するようになったわけだが、この傾向を主導したのは三期生であった。一、二期生は、自分たちの言動が招いた学内のキリスト教布教活動の禁止ということもあって、クラークのイデオロギーとホイラーの思想との対立的性格が見えてきたところか

ら更に思想の幅を拡げてゆくまで、二人から学んだことを開識社のなかで生かすことができなかつた。結局そのため、イニシアティブを三期生に譲らざるをえず、三期生以下の学生は当時の民権思想を彼らなりの立場で育ててゆく手がかりを持ちえなかつたのである。

## 〔注〕

(1) 本論の執筆時に筆者が入手していたのは、第一九二会までの記録であったが、『札幌農学校史料(一)』には更にそれ以後の記録も収められている。が、本論の狙いは、初期開識の性格を明らかにすることであつたので、このままとした。

(2) この発言は、あるいは植木枝盛の「世界大野蠻論」(『愛国新誌』4~5号)に關係するかもしれない。ただし発言内容が不明なので断定はできない。

(北海道大学文学部助教)